



定年後、世界一周ひとり旅

第2回



インド、トルコ、エジプトはすごい

今回は、定年後にやりたかった4つのことと、その一番目である世界一周ひとり旅に向けた準備の話をしました。

実際の私の世界一周ひとり旅は、定年退職した2014年の6月1日から始まりました。74日間で14カ国の道中、信じられないようなハプニングやトラブルの連続で、今思えばよくぞ無事に帰ってきたとしか言えません。

当初の計画は90日間で15カ国の予定でしたが、終盤は心が折れて（不覚にもホームシック！）途中帰国となりました。しかし、途中リタイアとはいえず、一人で中学生レベルの片言の英語で歩いたことは、「俺もまだまだやれるぞ」と思わせてくれました。前回書いたように次の人生40年も頑張れるような気になりました。本当に画期となる旅でした。

6月1日旅が始まりました。福岡発、羽田乗り継ぎのシンガポール行きです。羽田方面の天候の関係で到着がかなり遅れました。国内線から国際線へぎりぎりセーフでした。出だしから「やばい」状況でした。「何が起こっても自分で解決しなくてはならないんだぞ。頭と体をフル回転しなくちゃなあ」と

言い聞かせ、シンガポール航空の機中の人になりました。

最初の旅の目的地にシンガポールを選んで正解でした。英語がどこでも通じる。治安は問題なし。地域は狭いので地理も国内の交通もすぐに覚えられる。この後に訪ねるインドや中東の暑さの前に体を慣らすこともできる。さらには、リトル・インド、アラブ人街と先の旅の「予習」ができそうな場所があるからです。

ホテルは予想通り「バスタブなし」。これも練習です。地下鉄のパスの買い方、乗り方、屋台での指差し注文もトレーニングできました。とにかく「習うより慣れろ。何とかなる」です。旅の達人はよく「見知らぬ人と仲良くなるのもひとり旅の楽しさです」と書いています。私は性格上これがだめです。人見知りとまでは言いませんが、言葉の壁以上に積極性が足りません。

シンガポールの夜の観光ツアーは4人組の日本語OKという中国人美女と私だけという僥倖に恵まれました。船上レストランでの夕食からマリーナ・ベイ・サンズ、マライオンまでの間、異国で出会った彼女らとた

くさん会話を楽しむチャンスでしたが、残念ながらあまりおしゃべりできませんでした。

ベネルクス三国鉄道の旅に出かけた際の機中で、窓際の席からC Aとおしゃべりしていましたが、途中からは席を立てて通路でC Aと長話、長話。こういう性格がうらやましいです。

今回のひとり旅、出だしの数カ国は現地の観光ツアーを予約利用しました。完全行き当たりばつたりの旅はさすがに自信がなく、ヨーロッパに入ってから前の晩に次の日の行動を考えることにしていました。

シンガポールでは前述の夜の観光ツアーと、陸路国境を越えてマレーシアに入り世界遺産の街マラッカを訪れる観光ツアーを予約した他は、一人でぶらぶらしました。マラッカへの観光ツアーはなんと私一人だけ。インドでもエジプトでも私一人という観光ツアーがありました。これはなんだか得した感じです。無論すべてがマルではありませんが。

現地のツアーガイドと話していて感心したのは、どのツアーガイドも地元で日本語を習得していたことです。来日しても十分生活できるレベルの日本語です。「食べていくため



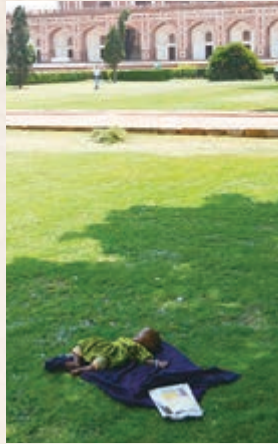
熊野 譲

【くまの・ゆずる】

1953年山口市生まれ。国内外の旅、鏝絵（家の壁などにつくられる漆喰のレリーフ）画像の収集、下手なゴルフを趣味とする部分年金生活者。元公立中学校教師。下関市在住。



イスタンプールの猫は
人なつこくて



「この子は学校にも行かないし、
仕事は親と同じ」です。デリーの
世界遺産の庭掃除をする親の赤
ちゃん



気温47.8℃。タージマハルで
眼球まで灼けそう



旅行者は一人もいない地元の食料品市場に突撃！



イスタンプールのモスクから
は定期的に大音響でコーラン
が降り注ぐ

アジアとヨーロッパの交差点、ボスポラス海峡に行く連絡船より



にね」や「少しでもいい生活をしようと思えば」
など理由は極めて即物的でしたが、教養と
しての語学習得は厳しいことを、あらためて
確認しました。
かつてベトナムで出会ったツアーガイドも
来日経験などありません。日本語を習得で
きれば稼げると頑張った結果「私はバスタブ
のある部屋に住んでいる。普通のベトナム人
ではめったにないことなんだよ」と誇らしげ
でした。
アジアや中東を歩くと、人々の生きるこ
とへの執念というか、生きることへの必死さ
とかに圧倒されることが多くあります。
今回の世界一周ひとり旅で、「ウーン、す
ごいなあ」と思わされた国を3つ挙げると、
インド、トルコ、エジプトが文句なしです。

本の知識などでこれらの国が日本人の感覚
や価値観などからすると、理解不能という
か、衝撃的というか、びっくりほんどころの
ショックではないのだということは知ってい
ました。
インドの空港からホテルまで私を運んだ車
は、車体ぼこぼこのサイドミラーなし。窓ガ
ラスは開かず速度計も止まったまま。もちろ
んエアコンなし。それでもバンバン飛ばして
いくのは、さすが日本車の軽自動車でした。
ふと気が付くと、横を牛が数人乗せた
台車を引っ張って全力疾走していました。
ホテルまでの数十分の間に、これまでの60年
間の人生で聞いた車の警笛の何倍もの警笛
を聞きました。
深夜ですが、歩道のあちこちに人が横に

なっています。死体かとびっくりしましたが、
どうやら涼んでいるようでした。滞在中の最
高気温は47・8℃でした。夜も40℃くらい
はあったでしょうか。
エジプトでは道路が渋滞すると、またコール
タールの舗装が乾かない走行禁止のゾーンに
平気が入って先を急ぐ車を何台も見ました。
カイロ郊外の遺跡ツアーも私一人でしたが、
総勢4名の武装警官が私を警護しました！
トルコはタクシーの中もずっとコーランの放
送。街なかには朝から晩まで定時にモスクから
大音量のコーラン。エジプトのツアーガイド
は日に数回ある祈りの時間は完全確保です。
最初の5カ国とりわけこの3カ国でかなり
精神的に疲れしました。先は長い、どうなる
のでしょうか。